



語り手 半田弥一郎さん
 (明治45年生まれ)
 収録・昭和57年7月27日

あらすじ

昔、山奥に一軒家があり、おばあさんが一人で住んでいました。旅回りの坊さんが泊めてもらうことになりました。

おばあさんはお粥などを坊さんに食べさせ、ふと思いついて、「仏さんを拝むことを知らないので、今夜はお経を教えてござっしやいな」教えて進じるだ」と坊さんは答えたが、その坊さんは偽者で、お経を読むことは知らなかったのです。

「どう言わいいかいな」坊さんは考えていましたら、庭の隅からネズミがチョロっと出て入りました。そう思っていましたら、ちよつと止まり、しばらくすると、ネズミがチョロチョロと歩きました。坊さんは、このことをお経に読みました。

ひよろひよろござった
 はいつくぼった

これを繰り返して坊さんが言いました。

おばあさんは、それをしっかり覚え、毎晩唱えておりました。

ある晩。盗賊がおばあさんを殺してお金を盗ろうとその家へ来ました。おばあさんが仏さんの前で、

「ひよろひよろござった」。こう言います。盗賊が驚いて、「ばあさんは、わしの来たのを知っているかいな」。あわててしゃがむと、おばあさんが、「はいつくぼった」と言います。歩きかけると「ひよろひよろござった」。また止まって四つんばいになると、「はいつくぼった」。盗賊は、ばあさんが寝るまで待つておろうと、屋根の庇へ上がって待つことにしました。雨がしよば降ってきました。しかも今度は大きい狼が、

「ばあさんを噛んでやらあ」と思つてやつて来ました。

間もなく、すごい雨になりました。雨漏りがするのです。おばあさんは早速盥やバケツを雨漏りの下へ当て「獅子、狼より雨の漏り殿が一番恐ろしいわい」と独り言しました。狼は、「わしよりも恐ろしいものが世の中にある。その雨の漏り殿でどういう者かな」と考えているとき、屋根にいた盗賊は雨が降ってきたので、下へ飛び降りました。それがちょうど狼の背中の上でしたので、狼

は「雨の漏り殿が背中の上に降りた。こりや大変だ」と逃げました。

盗賊は盗賊で、「大きな者の上に降りたもんだな。ばあさんが仏さんを拜んでおるもんだだけ、仏さんの力でどうしようも」を呼び出せたのじやろう」。こう考えて、急いでわが家へと帰りました。おばあさんは盗賊にも殺されず、狼にも噛まれずすみました。

それというのも、偽の坊さんから教えてもらつたお経を、本当のお経と信じて拝んでいたため、仏さんはちゃんとおばあさんを助けてくださったのです。

ストンカラン。

解説

県立隠岐島前高校郷土部が都万村の民話調査を行ったおり、それならばと前もって録音して準備してくださいましたもの一つである。

この話は、かなり有名なものなので、皆様もどこかでお聞きになったであろう。

(元島根大学法文学部教授)